

CONTENTS

CCOP第55回管理理事会報告

サイエンスキャンプ
「仙台市郊外で地質の調査」

「グランプリ地球にわくわく2010」
第2回日本地学オリンピック大会開催

地質標本館 春の特別展
「揺れる日本列島」と関連イベント

ジオネットワークつくばニュース4月号

各受賞記事 理事長賞 1件
文部科学大臣表彰 3件

平成22年度GSJ新入職員研修報告

新人紹介

スケジュール

編集後記

CCOP第55回管理理事会報告

高橋 浩 (地質調査情報センター)

CCOP 第 55 回管理理事会は、平成 22 年 3 月 15 日から 17 日まで韓国、釜山のノボテルアンバサダーホテルで開催され、カンボジア、中国、インドネシア、日本、韓国、マレーシア、パプアニューギニア、フィリピン、タイ、東チモールの加盟国代表団及びアドバイザーグループ代表の D.B.Prior 博士 (テキサス大学筆頭副学長) が参加しました (写真 1)。日本からの代表団としては、加藤碩一 (GSJ 代表)、嶋崎吉彦 (地質調査情報センター参与)、高橋 浩が参加しました。年次総会に先立ち、Chang Ho Wan 博士 (CCOP 韓国常任代表、KIGAM 所長) による歓迎の挨拶に続いて、Han Uk 博士 (韓国工業技術院院長)、Maeng Eon Park 博士 (釜慶大学長) による祝辞がありました。続いて Dato's Yunus Abdul Razak 氏 (CCOP 管理理事会議長、マレーシア鉱物地質局長) による開会の挨拶の後、会議が始まりました。

Razak 氏が議長として会議を主催し、書記が選任された後に議事に入りました。最初に Hee-Young Chun 事務局長と 3 人の専門別コーディネーターより 2009 年 1 月～12 月の 1 年間について、事務局運営、予算執行状況、活動、決算などの報告がありました。続いて各コーディネーターが 2010 年の事業計画ならびに新プロジェクト提案などを報告しました。この報告について理事会は協力国の貢献に謝意を表して 2010 年の事業計画を承認しました。加藤代表は「CCOP Geoheritage Book」の日本語訳版について、写真及び図の著作権問題が解決すれば今年中に日本語版を出版すると述べ、コーディネーターからは 2、3 の写真を除いて著者の承認が得られているとの回答がありました。また、加藤代表は各分野のコーディネーターは毎月あるいは少なくとも隔月で加盟国の関連セクター担当者に連絡を取るよう要請しました。

CCOP 新事務局長には中国の He Qingcheng 博士が先の選挙で当選し、参加者から暖かく迎えられました。

第 47 回年次総会はインドネシア、スラヴェシ島マナドで 2010 年 10 月 18～23 日、

第 56 回管理理事会は同 24～25 日に開催することとなりました。また、第 57 回管理理事会はタイのチェンマイで開催されることとなりました。

3 月 17 日には釜山北方の慶州への巡検が行われ、仏国寺、万博記念公園、化石博物館を訪問しました (写真 2)。仏国寺は 1000 年以上の歴史を持つ古刹ですが、仏国寺花崗岩と呼ばれている韓国の白亜紀花崗岩類の模式地でもあり、日本と朝鮮半島の先新第三紀花崗岩類の比較検討を行っている筆者には印象深いものがありました。

CCOP には 40 年以上の歴史があり、嶋崎



写真 1 CCOP 第 55 回管理理事会参加集合写真。



参与は長年にわたり CCOP に関与、尽力され、CCOP の名誉アドバイザーとして、今回の会議でも堅い信頼関係に基づいた強い存在感を示されていました。人と人あるいは国と国との信頼関係は、一朝一夕で築かれるものではなく、長年の努力の積み重ねによって築かれるものだと感じました。CCOP によって築かれた GSJ とアジア諸国、欧米諸国との信頼関係を継承、発展させてゆきたいものです。

写真2 仏国寺正門の写真。

サイエンスキャンプ「仙台市郊外で地質の調査」

高橋 裕平 (地質調査情報センター)

高校生対象の地質調査実習を、独立行政法人科学技術振興機構主催サイエンスキャンプ行事に共催する形で、2010年3月23日から25日に仙台市郊外において実施した。このサイエンスキャンプの企画運営は東北センターが行い、現地における地質調査実習を地質調査総合センターが協力する形で、加藤碩一代表、西岡芳晴と中川 充それに高橋が参加した。一方、受講生の高校生は、総勢10名で、1年生(男子3名、女子3名)と2年生(男子1名、女子3名)からなる。北は青森県、南(西)は兵庫県からの参加であった。

第1日目：開講式、東北センター見学、地質調査入門

午後1時から東北センターで受付を始めた。受講生が着々と集まり1時30分からキャンプを開始した。開講式に引き続き東北センター・コンパクト化学プロセス研究センターの見学を行った。その後、野外観察に利用する機器の説明、岩石の分類法の実習を行った(写真1)。

貸し切りバスで約50分かけ、仙台市郊外の秋保(あきう)の宿に到着した。部屋割り後、夕食を食べながら、受講生と講師それぞれが自己紹介を行った。夕食後は、例年通り、加藤代表が「宮沢賢治と地質学」の特別講演を行った。岩手県から参加の高校生は大変興味を持ったようである。

第2日目：地質図作成実習、ゼオライト鉱山見学

足慣らしを兼ね、宿の近くの名取川沿いの遊歩道を歩きながら軽石凝灰角礫岩(湯元層)を観察した。秋保石と呼ばれ、石材として利用されている。

足慣らし後、熊沢林道および中身山林道で地層の観察を行った。中新世の玄武岩(高館層)、砂岩(茂庭層)、凝灰岩(梨野層)が下位から上位に順に出てくる。ハンマーで石を割り、クリノメーターで地層の走向傾斜を測定するという地質調査の基礎を体験した。最上位の細粒凝灰岩質シルト岩(白沢層)からは木の葉の化石が産出する(写真2)。

次はバスで15分ほど移動して、ゼオライトを採掘して

いる新東北化学工業株式会社を訪問した。会社の概要や開発製品の説明を受けた。その後、外の採掘場を案内していただき、時間が許す限りゼオライトの観察と採集をした。

宿に戻り各自その日の復習を行い、ルートマップの整理を行い、地質断面を作成した。

総合討論の時間では、「地球の将来」をキーワードとして、受講生に環境問題について日頃考えていること、疑問に思っていることを語ってもらった。地球温暖化が本当なのか、鳩山首相の二酸化炭素25%削減宣言の数字の根拠



写真1 岩石の観察実習。



写真2 露頭の観察。

の疑問まで出て受講者の問題意識の高さを感じた。

第3日目：地質図の話、天文台、閉講式

朝から雪のため野外調査を断念した。その代わりに、宿からの出発を遅らせて西岡が地質図の基礎と利用の講義を行った（写真3）。この3月に日本の20万分の1地質図完成という新しいトピックもあり、現場の息吹が伝わったようだ。

荷物をバスに積み込み、バスで約30分かけ仙台市天文台に赴いた。宇宙科学の一端にもふれてもらった。それから青葉の森観察センターに移動した。天候がよければ森の動植物観察や竜の口層の化石床を観察できるのだが、今回は野外観察を断念し、同センターのセミナー室で昼食と閉講式を行った。加藤代表が受講生に修了証授与し、今回のキャンプのプログラムが終了した。



写真3 地質図の話。

「グランプリ地球にわくわく2010」第2回日本地学オリンピック大会開催

中島 礼・吉川 敏之（地質情報研究部門）・高橋 裕平・藤原 智晴（地質調査情報センター）

3月24日～26日の3日間、第2回日本地学オリンピック大会がNPO法人地学オリンピック日本委員会の主催でつくば市で開催されました（写真）。この大会は、今年9月にインドネシアで開催される第4回国際地学オリンピック大会の国内本選となっています。昨年までは東京で開催されましたが、今回は地球科学の研究所が集まるつくば市で開催されることになりました。参加者は全国から集まった中学2年生から高校2年生24名の生徒たちです（中学2年生は特別参加）。彼らは、約700名参加した筆記試験の一次予選で選抜されたそうです。生徒たちの学校名をみると、同じ高校からの生徒が複数いて、熱心な地学の先生がいることが推察されました。

24日は産総研共用講堂にて、午後から開会式が始まり、そしてとっぷ・レクチャーという地球科学の最新の研究成果についての4講演、山野博哉氏（国立環境研究所）による「地球温暖化とサンゴ礁」、三上正男氏（気象研究所）による「ミクロの砂粒から地球が見える」、大木真人氏（JAXA）による「宇宙から地球を知る～地球観測衛星とその仕事～」、齋藤文紀氏（地質情報研究部門）による「アジアの大河川とメガデルタ」がありました。それぞれが研究所推薦の研究者ということもあり、内容が濃くかつわかりやすい講演でした。半日でこれだけの講師の研究を聞くことができたのは、つくばならではの、もちろん生徒たちも満足してもらえたのではないのでしょうか。

25日は気象研究所、JAXA、産総研の各研究所で実技試験が行われました。生徒たちは8人の3グループに分かれ、各研究所を順番に回りました。産総研では地質の実技ということで、青木正博氏（地質標本館）によって岩石・鉱物鑑定という試験が作成されました。試験内容は準備された16個の岩石と鉱物を鑑定するというものですが、教科書だけで勉強しては実物を判別することは困難で、実際に標本を手にとってみた経験がなければ難しいと思われます。半数以上が教科書に良く出てくる標本ですが、試験を受けた生徒たちの顔をみると、とても難しかったというぐったりした顔をしていました。ただ、試験後は地質標本館の見学となっており、もともと地学が好きな生徒たちばかりということで、見学中は目を輝かせていました。

26日は2日目の実技試験から選抜された8名が面接を受け、その中から4名が国際大会への出場者に選ばれま



写真 地学オリンピックへ参加した生徒たち。

した。エキスポセンターや国立環境研究所の見学後、産総研の共用講堂において表彰式が行われました。表彰式では1番の成績の生徒が茨城県知事賞、女子生徒での1番がつくば市長賞、そして産総研の実技試験での上位5名が特別賞を受賞しました。理科の科目の中でも地学は人気が高く、高校での教師数や授業数も少ないようです。しかし、

そのような状況でも「地学が好き」という生徒が多くいて、しかも実技試験で素晴らしい能力を発揮した生徒がいたということはまぎれもない事実です。このような地学に興味を持つ生徒たちが将来どのような分野に進学したとしても、私たちの研究分野にとってはとても喜ばしいことではないかと思いました。生徒たちの今後の活躍を祈ります。

地質標本館 春の特別展「揺れる日本列島」と関連イベント

澤田 結基（地質標本館）・堀川 晴央（活断層・地震研究センター）

地質標本館では、4月13日（火）から7月11日（日）まで、春の特別展「揺れる日本列島」を開催しています。この特別展では、地震・活断層研究センターの全面的な協力のもと、産総研で行われている地震研究の最前線をパネルと実物展示で紹介しました。

パネル展示では、「日本の地震」「プレート境界で起きる巨大地震」「活断層の地震」「コンピュータで地震を再現する」の4つのテーマに分けて、それぞれのテーマを進めている研究者が執筆しました。このうち「日本の地震」では、地震とプレート境界や地震の種類などの基礎知識を解説しました。「プレート境界で起きる巨大地震」では、アスペリティの考え方から入り、東海・東南海・南海地震の予測のための地下水観測や、沿岸の堆積物から探る巨大津波の痕跡について説明しています。「活断層の地震」では、活断層の基礎知識からトレンチ調査、岩石破壊の室内実験を、「コンピュータで地震を再現する」では、地下深部で起きる地震の運動や揺れの伝わり方をシミュレーションで調べた結果を紹介しています。

特別展では、以上のようなパネル展示とともに、地質標本もあわせて展示しています（写真1）。関谷断層（栃木県）のトレンチではぎ取り標本は、逆断層による地層

の変位がはっきりと読みとれる逸品です。はぎ取り標本にあわせて設置したパネルでは、トレンチ断面から活断層の活動履歴を読みとる流れを説明しています。また、地下水位の観測のために紀伊半島で掘削された、マイロナイト化したトータル岩のボーリングコアも展示しました。このコアからは、中央構造線に沿った断層運動によって岩石が変形を受けた様子をうかがい知ることができます。実物の展示はやはり注目度が高いようで、訪れた方の多くが足を止めてご覧になっています。

4月18日（日）には関連イベントとして、宍倉正展氏（文部科学省）による講演会「未知の巨大地震の証拠を求めて地球の果てまで」を共用講堂2階の大会議室で開催しました（写真2）。会場には、約70名の方が集まりました。講演では、2004年スマトラ沖地震で隆起したアンダマン諸島（インド）のサンゴ礁や、南米チリの津波堆積物などの調査風景を織り交ぜながら、巨大地震の活動履歴を調べる研究がどのようなものか、わかりやすく解説していただきました。質問も多く飛び出し、多くの方が地震研究への関心を深めておられたようです。

春の特別展は7月11日まで開催しています。みなさんもぜひ、地質標本館へ足をお運びください。



写真1 関谷断層のトレンチはぎ取り標本の展示。



写真2 講演会の様子。宍倉氏にはフィールドワークについて熱く語っていただきました。

ジオネットワークつくばニュース4月号

藤原 智晴・古川 竜太・渡部 芳夫・高橋 裕平（地質調査情報センター）

4月は、サイエンスカフェ、野外観察会などの定例行事はありませんでしたが、この春に行ったコンテストの表彰をするために、大判の賞状とたくさんの副賞をかかえて市内の各小学校にお邪魔してきました。

市内の小学生を対象にした「わたしのまちつくばの〇〇」のコンテストにはたくさんの応募がありました。その中から最優秀賞・優秀賞・特別賞10作品を選出し各校で受賞者を表彰をしました。

校長室での表彰や、全校朝礼での表彰など表彰の形はいろいろでしたが、どの学校でも受賞した子供たちの笑顔が印象的でした。



写真1 谷田部小学校にて。
写真3 竹園東小にて。

写真2 吾妻小にて。
写真4 竹園西小にて。

平成21年度理事長賞（本格研究）を受賞 — 土壌汚染リスク評価技術の開発とその普及を通じた社会貢献 —

地圏資源環境研究部門

地圏資源環境研究部門の駒井 武氏、川辺能成氏、原 淳子氏、坂本靖英氏、杉田 創氏の5名は、「土壌汚染リスク評価技術の開発とその普及を通じた社会貢献」の業績により、標記理事長賞を受賞しました。本件は、今年の3月4日の理事会で決定され、4月1日に表彰式が行われました（写真）。

土壌汚染の問題は環境汚染問題に対する意識の高まりを背景に、近年では深刻な社会問題と捉えられており、平成15年に土壌汚染対策法が施行されて以来、土地取引や土地の活用の際に土壌・地下水汚染への対応の必要

性が増加の一途をたどっています。このために駒井氏らは、土壌汚染に起因する人体へのリスクを定量的に把握する「地圏環境リスク評価システム (Geo-environment Risk Assessment System (GERAS))」を開発し、産業界や社会へ提供して普及を行ってきました。GERASは、汚染物質、土壌や水理地質条件、人体への暴露過程などのパラメータを入力し、健康リスクを計算するシステムであり、スクリーニングモデル、サイトモデル、詳細モデルと3段階で開発がなされました。平成18年にプレス発表して公開したサイトモデルまでのシステムは既に約1,000の事業所等で活用され、また昨年平成21年にプレス発表して公開した詳細モデルも既に300件以上の頒布がなされています。

GERASの開発と普及は、汚染物質、地下水、岩石鉱物、微生物などの要素の解明を行い、システムを構築し、製品化して社会に提供するまさに本格研究の典型であり、シンセシオロジー (2008, Vol.1, No.4) にその詳細が示されています。今回の受賞は、産総研の地質分野が社会の要請に応える本格研究を実施していることを改めて示したものであります。

写真 理事長賞（本格研究）を受賞した原 淳子、川辺能成、駒井 武、坂本靖英、杉田 創の各氏（左から）。



平成22年度文部科学大臣表彰 創意工夫功労者賞を受賞 —地質図DB構築に向けたベクトル数値化に係る考案—

地質調査情報センター

地質調査情報センター地質情報管理室の宮崎純一氏は、「地質図DB構築に向けたベクトル数値化に係る考案」の業績により、標記創意工夫功労者賞を受賞しました。これで当センターでは5年連続で同賞を受賞しています（GSJニュースレターNo.20,32,44,56参照）。

産業技術総合研究所は日本列島の地質に関する調査研究を重要な業務の一つとして位置づけています。この業務実施に当たってはさまざまな地質現象の考察・解明が必要で、その際には大量の地質情報の集積と各データ間の相互関係の考察及び総合化が不可欠です。このため、業務実施の基盤として地質データが電子化処理可能なファイルとして整備され、またデータベース化されていることが必要とされています。

宮崎氏は、地質調査総合センターが刊行している各種地質図類をベクトル数値化し、数値ファイルとして整備することにより、GIS（地理情報システム）を通じて地質図情報を高度にかつ効率的に活用することを業務目標として取り組んできました。このため、地質図情報の作成・整備のための基準を検討・考案し、これに基づいて種々の地質図のベクトル数値化を進めデータファイルとして整備・公開してきました。ベクトル数値データは、画像データと異なり、拡大・縮小が可能で画質が劣化しないこと、地質図を構成するライン・ポリゴンの属性を数値で統一的に指定・変更できるなどの特性を有していることから、その整備により地質図情報の多様な利用が可能となりました。このベクトル数値化の成果は、地質学に係る基礎的研究に大きく貢献するとともに、異種の地質情報を統合した数値地質図の作成や開発済・開発中の地質関連データベース構築

等において基本データとして広く使用されています。

例えば産総研がRIO-DBとして公開している「20万分の1日本シームレス地質図データベース」は、本ベクトル数値化で整備された「20万分の1数値地質図幅集」を使用して日本全体について統合したものをベースとして開発されています。

また、宮崎氏の進めた地質図類のベクトル数値化は、さまざまなGISを介して当該地質図情報と他の地形・地質情報を重ね合わせることが可能となり、外部での地質図情報がより利用しやすいものとなり、普及の面でも大きな貢献となっています。

以上のように宮崎氏は地質図をベクトル数値化することにより、地質関連DB構築のための基礎地質図情報の提供、また地質図の新たな利用方法の促進等に大きく貢献していることが認められ今回の受賞に至ったものです。宮崎氏の更なる活躍が期待されます。



写真 創意工夫功労者賞を受賞した宮崎純一氏。

平成22年度文部科学大臣表彰 科学技術賞（開発部門）を受賞 —認証地球化学標準物質の開発—

地質情報研究部門

平成22年4月13日、京王プラザホテルにて平成22年度科学技術分野の文部科学大臣表彰（科学技術賞・若手科学者賞）の表彰式が行われ、地質情報研究部門地球化学研究グループの今井登グループ長他4名（岡井貴司、寺島滋、御子柴真澄、太田充恒の各氏）が「認証地球化学標準物質の開発」の業績により科学技術賞（開発部門）を受賞しました。

岩石・鉱物等の正確な化学分析を行う際には、主要成分の含有量が類似し、目的成分の濃度が決められた標準物質

（地球化学標準物質）を用いることが必要です。地球化学標準物質の作製は、これまでは各発行機関が独自の品質基準で行ってきましたが、国際的な標準化の流れで、ISO等の国際基準への対応が求められるようになってきました。

地球化学研究グループは地質調査所時代の昭和39年から地球化学標準物質の作製を開始し、世界各国（43カ国460機関、うち国内260機関以上）の研究機関との共同研究（約10,000個の試料を配布）を行ってきました。そして化学組成や同位体組成、年代値に関する信頼性の高い



写真 科学技術賞（開発部門）を受賞した、御子柴真澄氏、今井登氏、岡井貴司氏、太田充恒氏（左から）。なお、都合により寺島 滋氏は欠席されました。

データを、長期間にわたって組織的に公表してきた実績から、標準化の国際動向に対処するため、同グループは他国に先駆けて ISO 対応の地球化学標準物質の開発に取り組んできました。

本開発では、ISO の定める基準に従った品質管理により、試料調製及び認証値の設定を行い、ISO 認定機関より標準物質生産者の認定を取得しました。この認定に基づいて、主要成分に関する化学分析のトレーサビリティを証明する「認証標準物質」を配布できることになりました。

今回の受賞の対象となった「認証地球化学標準物質の開発」は、岩石・鉱物等の化学分析値を ISO に適合した認証標準物質として公表することで、具体的には次のような波及効果があります。

1. 地球科学関連物質に関する化学分析の国際標準化、分析の信頼性の向上およびトレーサビリティの確立。
 2. 世界に通用する地球化学標準物質を生産できる国内唯一の発行機関としての研究ポテンシャルの明示。
 3. 研究機関のみならず一般の分析機関の標準物質の普及、ならびに分析技術の向上と分析の効率化への寄与。
- 以上のような顕著な学術的、社会的貢献により文部科学大臣表彰を受賞しました。

平成22年度文部科学大臣表彰 若手科学者賞を受賞 一沿岸域の堆積物を用いた巨大地震の履歴解明に関する研究一

活断層・地震研究センター

活断層・地震研究センターの澤井祐紀氏は平成 22 年文部科学大臣表彰若手科学者賞を受賞しました。同研究員が今まで行ってきた巨大津波を発生させる海溝型地震に関する研究成果が評価された結果です。

日本列島の下には、太平洋プレートやフィリピン海プレートが沈み込んでおり、それらの沈み込み境界では、ほぼ同じ場所で同じ規模の海溝型地震が数十年から数百年間隔で繰り返し発生すると考えられていました。しかしながら、北海道東部では、今まで知られていた海溝型地震による津波よりも遙かに規模の大きい巨大津波が発生していたことが、活断層研究センターに在籍していた七山 太氏（現：地質情報研究部門）や佐竹健治氏（現：東京大学地震研究所）によって明らかにされ、世界的な注目を浴びました。そのような先駆的な研究に引き続いて澤井氏は、約 400 年前に発生した北海道の巨大津波が、異常な地殻変動を伴ったことを、地質学的手法を用いて数十 cm オーダーの精度で明らかにしました。その手法は、堆積物に含まれる珪藻化石の構成群集の解析に基づいて、淡水、汽水、海水環境の変化を明らかにし、地殻変動を復元するというもので、近代的な測量が実施される以前の地殻変動を地層から再現することができます。北海道での研究結果は科学誌 Science に掲載され、巨大地震の震源モデルと津波シミュレーションの推定精度の向上に大きな貢献をしまし

た。このように過去の地殻変動を再現することは、巨大地震の発生メカニズムや応力蓄積過程の解明だけでなく、地震発生時期の予測にも必要な情報です。海外でも近年研究が盛んになっており、paleogeodesy（古測地学）という言葉がよく用いられます。この研究を進め、過去数千年間の地殻変動を数十 cm の精度で明らかにできれば、地球物理学的な巨大地震発生サイクルを明らかに出来る可能性があり、現実的な地震の将来予測につながると期待されます。



写真 知多半島のフィールドで調査中の澤井祐紀氏。

平成22年度GSJ新入職員研修報告 濱崎 聡志 (地質調査情報センター)

平成22年度のGSJ新入職員研修が、4月12～16日に行われました。今年度は4月1日の辞令交付後、2～9日に産総研全体の研修が行われたため、GSJ研修はその後の12日からになったものです。本年度は新規採用職員10名のほか、産総研特別研究員、テクニカルスタッフ、派遣専門技術者など総勢27名の受講がありました。初日の第7研究業務推進室からの日常生活・勤務形態・車両等の各種手続きに関する説明に続き、地質分野担当山崎理事、加藤GSJ代表からの地質分野全体に関する説明、各ユニット長による研究紹介、所内の図幅や薄片関連部署の見学など盛りだくさんの内容でした。また、自動車運転、野外調査、室内実験室、共同利用機器に関する安全講習会は新入職員に限らず、希望する一般職員に対しても行われました。さらに、4月28日には新入職員の研究発表会と所幹部主催の歓迎会も行われました。これら一連の研修後、5月11日には霞ヶ浦、筑波山周辺において巡検、そして5月9、15、16日には一般者対応のアウトリーチ体験実習も行われました。いずれも、講師、案内等多数の関係者のみなさまのご協力のもと、予定通り終了できたことに感謝いたします。



写真 平成22年度新入職員研修受講者。

新人紹介

天野 敦子 (あまの あつこ)



4月1日付けで地質情報部門海洋地質研究グループに配属されました。天野敦子と申します。愛媛大学で学位を取得し、その後の約2年間、同大学でポスドクとして在籍しました。そして2009年4月に産総研のポスドクとして、つくばへ移動してきました。

これまでの主な研究は、後背地の影響を反映しやすい沿岸域の半閉鎖的な内湾における時空間的な環境変化を、堆積物の粒度や元素などを用いて復元し、その変化の要因や過程について議論してきました。主な調査海域は瀬戸内海やフィリピン・マニラ湾などで、地質学スケールでは非常に短時間である過去約数百年間の変化に注目して研究を行っていました。そのため、周辺の人間活動が海域環境に及ぼす影響の評価が主要な結果となることが多かったです。また、今年の産

総研ポスドクの期間には、新潟沿岸海域で採取されたコア長40mのボーリング試料の層相解析を行い、後期更新世以降の海水準変動に伴う環境変動について検討しました。まだ議論中ですが、陸-海域間の環境変動過程の解明に繋げていきたいと思えます。

これからは沖縄周辺海域の表層堆積物作製を行う予定です。これまでよりも広範囲かつ沖合の海域が研究対象となります。基本的な研究手法は同様なのですが、その規模は格段に大きくなるため、まずは船上調査に慣れることが必要だと思えます。そしてGSJの幅広い地質学の見識を勉強しながら、これまで培ってきた知識を発展させて、マップの作製や海洋環境への理解を深めたいと思えます。どうぞ、ご指導、ご鞭撻をよろしく願います。

スケジュール

4月13日～7月11日	地質標本館 春の特別展「揺れる日本列島」
5月23日～28日	地球惑星科学連合大会 JPGU Meeting (幕張メッセ) http://www.jpogu.org/meeting/
5月27日	日本リモートセンシング学会 (産総研) http://www.rssj.or.jp/gakujyutukouenka/48th/RSSJ48_index.htm
5月29日	日本地下水学会2010年春季講演会 (慶応大学) http://homepage2.nifty.com/jagh_gyouji/
5月31日～6月2日	物理探査学会 第122回講演会 (早稲田大学) http://www.segj.org/committee/gyouji/programView/viewProgram.php?event_id=29
6月5日	ジオネットワークつくば第5回野外観察会 http://www.geonet-tsukubajp/event/252
6月9日	石油技術協会春季講演会 (福岡) http://www.japt.org/
6月10日	日本古生物学会75周年記念講演および記念式典 (つくば国際会議場・筑波大学) http://www.soc.nii.ac.jp/psj5/
6月25日	ジオネットワークつくば第13回サイエンスカフェ http://www.geonet-tsukubajp/science/257

GSJニュースレターは、バックナンバーも含めて、地質調査総合センターホームページでご覧いただけます。

地質調査総合センターホームページ
<http://www.gsj.jp/>



編集後記

中野 司 (地質調査情報センター)

今月号には4件の「受賞」の記事が掲載されています。これらの記事はいずれも受賞者の直属の上司の方々に書いていただきましたが、慣例上、執筆者の名前を記さなかったため、この場を借りてお礼申し上げます。ご協力ありがとうございました。いずれにせよ、これらの受賞はGSJの地道な研究業務による社会貢献が目に見える形で評価されたものでまことによるこぼしい限りです。

快適と言うよりは汗ばむ陽気の毎日が続いています。戸外に見える涼しげな木々の揺らぎを眺めながら暑い室内で仕事をするのはつらいですね。

GSJ Newsletter No.68 2010/5

発行日：2010年5月20日
発行：独立行政法人産業技術総合研究所地質調査総合センター
編集：独立行政法人産業技術総合研究所地質調査情報センター
脇田 浩二 (編集長)
中野 司 (編集担当)
菅家 亜希子 (デザイン・レイアウト)
〒305-8567 茨城県つくば市東 1-1-1 中央第7
TEL:029-861-3687 / FAX:029-861-3672